

『恋する女たち』再考

——暖かな闇——

山田晶子

序

F. R. リーヴイスが、名著 *D. H. Lawrence: Novelist* において『恋する女たち』を彼の最高傑作であると賞賛して以来、彼の第5作目の長編小説は、内外において芸術性の高さを認められてきた。

Even a reader who is still far from having grasped the full development must be aware by the time he reached the end of the book that it contains a representation of twentieth-century England — of modern civilization — so first hand and searching in its comprehensiveness as to be beyond the power of any other novelist he knows of.¹⁾

ロレンス研究者はこの小説の主題とスタイルがオリジナルであり、現代文学において重要性なものであると論じている。『恋する女たち』の世界には、個人及び社会集団の暴力と憎悪・退廃が充満しているが、それはこの小説が第一次世界大戦中の1916年に書き上げられ、ロレンスの人間の運命に対する絶望感が反映しているためである。この小説が書きはじめられる前の1916年2月に、彼がO・モレル夫人へ宛てた手紙

一
八
八

には、当時の彼の心境がにじみ出ている。

This world of ours has got to collapse now, in violence and injustice and destruction, nothing will stop it.

.....

The only thing now to be done is either to go down with the ship, sink with the ship, or as much as one can, leave the ship, and like a cataway live a life apart. As for me, I do not belong to the ship; I will not live any more in this time. I know what it is. I reject it. As far as I possibly can, I will stand outside this time, I will live my life, and if possible, be happy, though the whole world slides in horror down into the bottomless pit.²⁾

この小説には直接第一次世界大戦への言及はないのだが、H.M. ダレスキーが指摘しているように、これは「戦争小説」である³⁾。この小説が主題としている戦いは国家と国家の戦いではなくて、個人と個人つまり親と子、男と女、夫と妻、雇主と使用人の戦いであり、また相反する思想と思想の戦いである。これらの戦いは、現代の人間が生きている社会状況・歴史展開から生じたものであり、『恋する女たち』は現代機械文明社会の本質を余すところなく描写していると言えよう。

『恋する女たち』の暴力に満ちた世界は機械組織に支配されている。人間は何ものかに束縛され閉じ込められている。「閉じた」、「封じる」、「監禁された」、「所有」、「縛られた」などの表現が繰り返し使われているが、このことが人間社会が目に見えない一種の牢獄であるという印象を与える。パーキンは、現代社会の人間は全てがはっきりした限界に閉じ込められていると思い、恋愛も古い形のままで恐ろしい束縛関係に思われる。彼はこの不自然な状態から有機的で自然な世界を目指し、自由を求める。新しい世界に生きる上で必要なのは、思想上の革新であ

る。ロレンスの代弁者であるパーキンが、他の人間が考えたことがなかった「闇」という新たな思想を唱道することによって、世界の革新を目指している。これまで『恋する女たち』の重要な主題である「闇」について論じられた論文は数多いが、ロレンスの思想の中核が書かれているこの作品において、彼の「闇」の公式化について論じた論文はほとんどないと思われる。

筆者は、本論において、ロレンスの「闇」の思想が『恋する女たち』において一つの頂点に立っていることを論じたい。彼の「闇」の思想が、この作品において初めて公式化されたことが、『恋する女たち』が最高傑作とされている一因になっていると思われる。では、ロレンスの「闇」はどのように公式化されているのであろうか。まず、①ロレンスの「闇」は常識的な冷たい闇に対して「暖かな闇」である。現代世界の「人工の光」の重視から目を転じて「闇」を認識することの必要を説いている。更に②「闇」と「光」という二元の均衡を重視している。これは男女の理想的な釣り合いを説くパーキンの「星の均衡」の思想に表れている。また「シングルネス」(singleness)の思想も二元の均衡に関わっている。③『カンガルー』でロレンスの代弁者である主人公サマーズによってキリスト教の愛の神に対立する神として登場する「黒い神」の仲立ち人である「黒い男」が、初めてパーキンによって体现されている。「闇」についてのこれら3つの公式化が『恋する女たち』において具体的にどのように描かれているかを本論で述べたい。

I 暖かな「闇」

『恋する女たち』の主人公であり、ロレンスの代弁者と考えられるパーキンは、「遠出」の章において恋人アーシュラと和解した後理想的な性愛を交わす。その時二人は闇に包まれているが、この闇は「豊穡な

闇」であり、パーキンはいつまでもその中から出たくないと思う。

They were soon out of the little town, and running through the uneven lanes of the country. Ursula nestled near him, into his constant warmth, and watched the pale-lit revelation racing ahead, the visible night. Sometimes it was a wide old road, with grass-spaces on either side, flying magic and elvin in the greenish illumination, sometimes the walls of a crew-yard and the butt of a barn.

“Are you going to Shortlands to dinner?” Ursula asked him suddenly. He started.

“Good God!” he said. “Shortlands. Never again. Not that. — Besides we should be too late.”

“Where are we going then — to the Mill?”

“If you like. — Pity to go anywhere on this good dark night. Pity to come out it, really. Pity we can't stop in the good darkness. It is better than anything ever would be — this good immediate darkness.”⁴⁾(317-18.)

二人はその後車で町へ向かうが、暗い車中でアーシュラはパーキンを見つめて、彼を「エジプトのファラオ」のようであると思う。エジプトつまり暖かな国である。

He sat still like an Egyptian Pharaoh, driving the car. He felt as if he were seated in immemorial potency, like the great carven statues of real Egypt, as real and as fulfilled with subtle strength, as these are, with a vague inscrutable smile on the lips. He knew what it was to have the strength and magical current of force in his back and loins, and down his legs, force so perfect that it stayed him immobile, and left his face subtly, mindlessly smiling. He knew

what it was to be awake and potent in that other basic mind, the deepest physical mind. And from this source he had a pure and magic control, magical mystical, a force in darkness, like electricity. (318)

パーキン「白い世界」を嫌い「闇」を愛する男であり、かつ暖かなエジプトという異教の国と関連づけられている。上の引用では、「魔法の」、「神秘的」、「闇の力」という言葉が表れているが、このような言葉はロレンスの他の小説でも多用されている。これらの言葉はキリスト教と相容れない異教性を感じさせる。

この小説の最後では、パーキンは全てを捨ててどこかへ行こうとアーシュラに語り、二人はもっと暖かな所へ行きたいと思う。具体的にはイタリアを挙げている。彼はチロルの山中にいるときその静けさと冷たさと凍りついた永遠性に耐えられない、と言い、アーシュラも純粋な新雪の目くらむような白さが自分を傷つける気がするので幽霊のような不自然な雪の光が嫌いであると言う。そしてパーキンとアーシュラは暖かな場所を求めるのである。これより前の「大陸」という章の初めの部分では、パーキンとアーシュラが船でドーバー海峡を渡る場面があるが、その船上でもアーシュラが暖かな闇の光を感じて幸福感に浸る個所が出て来る。

They seemed to fall away into the profound darkness. There was no sky, no earth, only one unbroken darkness, into which, with a soft, sleeping motion, they seemed to fall, like one closed seed of life falling through darkness, fathomless space.

They had forgotten where they were, forgotten all that was and all that had been, conscious only in their heart, and there conscious only pure trajectory through the surpassing darkness. The ship's prow cleaved on, with

a faint noise of cleavage, into the complete night, without knowing, without seeing, only surging on.

In Ursula the sense of the unrealized world ahead triumphed over everything. In the midst of this profound darkness, there seemed to glow on her heart the effulgence of a paradise unknown and unrealized. Her heart was full of the most wonderful light, golden like honey of darkness, sweet like the warmth of day, a light which was not shed on the world, only on the unknown paradise towards which she was going, a sweetness of habitation, a delight of living quite unknown, but hers infallibly. (388)

「深遠な闇」、「破られない闇」を通過して「底のない空間」に落ちて行くという表現は、ジョン・ミルトンの *Paradise Lost* において、神の軍隊に敗れたサタンの軍隊が暗黒の闇の中を地獄まで落ちて行ったという描写⁵⁾を連想させる。しかしパーキンとアーシュラは「救いの樂園」へ落ちて行ったのであり「命の種」として落ちて行ったのである。ここにもキリスト教の伝統に反抗する思想が表れていると思われる。「理性」を拒否して「非理性」の樂園を目指して二人は落ちて行く。このような例から分かるように、ロレンスを代弁するパーキンは「暖かな闇」という思想を『恋する女たち』で説いている。この思想はこの小説で公式化されていると思われる。

そして「黒い暖かな世界」と対照的に「白い冷たい世界」が描かれている。「湖上パーティ」の章では、パーキンが反発を感じながらもこの上なく愛情を寄せている男性ジェラルドの家であるクライチ家でのパーティが描かれている。最初は華やかで賑やかなパーティであったが、最後の方でクライチ家の若夫婦であるローラとその夫が湖の中で溺れて死ぬという事件が起きる。これ以前にパーキンは、人生には「生へ向かう銀色の流れ」と「死へ向かう暗黒の流れ」が存在するが、人々は普通は

「暗黒の流れ」には気がついていないのだと述べている。

“Do you smell this little marsh?” he said, sniffing the air. He was very sensitive to scents, and quick in understanding them.

“It’s rather nice,” she said.

“No,” he replied, “alarming.”

“Why alarming?” she laughed.

“It seethes and seethes, a river of darkness,” he said, “putting forth lilies and snakes, and ignis fatuus, and rolling all the time onward. That’s what we never take into count — that it rolls onwards.”

“What does?”

“The other river, the black river. We always consider the silver river of life, rolling and quickening all the world to a brightness, on and on to heaven, flowing into a bright eternal sea, a heaven of angels thronging. — But the other is our real reality —”

“But what other? I don’t see any other,” said Ursula.

“It is your reality, nevertheless,” he said, “the dark river of dissolution. — You see it rolls in us just as the other rolls — the black river of corruption. And our flowers are of this — our sea-born Aphrodite, all our white phosphorescent flowers of sensuous perfection, all our reality, nowadays.” (172)

ロレンスの「闇」の思想には、このように破壊的な意味を持つ闇と建設的な意味を持つ闇が含まれているのだが、これまで西欧のキリスト教世界では、闇を破壊的な要素を持つものだけでなく捉えておらず、ロレンスは闇の建設的要素を唱えた点に彼の作品のオリジナリティが存在すると言えよう。クライチ家のパーティで、若夫婦が溺死した事件は闇の否定的な側面を表わしている。他方で、パーキンとアーシュラが理想的

な性愛を達成した時の闇は建設的な闇であると考えられる。C. クラークはその論文で、「崩壊の過程は否定的であると同時に肯定的である」と述べ、H.M. ダレスキが「崩壊」を否定的にのみ捉えていると反論している⁶⁾。筆者は、クラークに賛同する。ロレンスは二元論を唱道しており、物事の意味には両面的要素があるのである。

建設的な「闇」と破壊的な「闇」の分岐点を表わしているのが、「トーテム」の章でボヘミアンたちがその一人のアパートで見たアフリカのトーテムである。「闇」は理性を拒絶した世界であり「官能」の世界をも意味する。パーキンは出産中の女性を彫ったトーテムを見て芸術の極地であると言う。それは官能世界の極地でもある。だから次にくる段階は官能世界の墮落である。

He saw vividly with his spirit, the grey, forward-stretching face of the Negro woman, African and tense, abstracted in utter physical stress. It was a terrible face, void, peaked, abstracted almost into meaning-less by the weight of sensation beneath. He saw the Pussum in it. As in a dream, he knew her.

"Why is it art?" Gerald asked, shocked, resentful.

"It conveys a complete truth," said Birkin. "It contains the whole truth of that state, whatever you feel about it."

"But you can't call it *high* art," said Gerald.

"High! There are centuries and hundreds of centuries of development in a straight line, behind that carving, it is an awful pitch of culture, of a definite sort."

"What culture?" Gerald asked, in opposition. He hated the sheer African thing.

"Pure culture in sensation, culture in the physical consciousness, really ultimate physical consciousness, mindless, utterly sensual. It is so sensual as

to be final, supreme.” (79)

パーキンは、このトーテムが南方民族の熱による破壊の道を示唆していると考えている。南方民族のこの女性像のトーテムは「ほっそりした」、「長い」、「重い」、「優雅な」という形容詞で表わされているが、ジェラルドに代表される北方民族も同じような形容詞で表現されており、甲虫やそれに類する昆虫のイメージが溢れていることにより分かる。つまり北方民族も今やその崩壊の極地まで達したということなのである。そして今や時代は北方志向から南方志向へと転回しなければならないとパーキンには思われるのである。「南方」は、女性のトーテムが表わしている官能の世界と思われる。ゆえにパーキンの思想によれば「官能」イコール「無意識」イコール「暖」イコール「善なる闇」という公式が出来上がるのである。これに対してジェラルドの世界では「人工の光」イコール「理性」イコール「意識」イコール「冷」という公式が存在する。ロレンスは、後者の公式を持つ現代機械社会を批判して前者を唱えたのである。『恋する女たち』において、彼が唱えた思想を理解するに当り、後者の代表であるジェラルドとプサムの破壊的側面を見よう。

先ずプサムであるが、酒場ポンパドールでパーキンとジェラルド及びボヘミアンが登場し、そこで唯一の女性であるプサムはボヘミアンの一人であるハリディの愛人であり、娼婦のような女性である。彼女はジェラルドに子供のように未熟な感じを与えるが、二人は一夜を共にする。彼女と別れてからジェラルドは彼女に金を渡すべきであったと後悔する。このように金を媒介にしていろいろな男と関係を持ち、ハリディと関係して無責任な妊娠をするプサムは、退廃的な人間である。彼女とジェラルドの惹かれ方は、電気が間に走っている、とたびたび描かれ、二人の人間はあたかも機械で出来ているかのような印象を与える。

The Pussum sat near to Gerald, and she seemed to become soft, subtly to infuse herself into his bones, as if she were passing into him in a black, electric flow. Her being suffused into his veins like a magnetic darkness, and concentrated at the base of his spine like a fearful source of power. Meanwhile her voice sounded out reedy and nonchalant, as she talked indifferently with Birkin and with Maxim. Between her and Gerald was this silence and this black, electric comprehension in the darkness. Then she found his hands, and grasped it in her own firm, small clasp. It was so utterly dark, and yet such a naked statement that rapid vibration ran through his blood and over his brain, he was no longer responsible. Still her voice rang on like a bell, tinged with a tone of mockery. And as she swung her head, her fine mane of hair just swept his face, and all his nerves were on fire, as with a subtle friction of electricity. But the great center of his force held steady, a magnificent pride to him, at the base of his spine. (73)

車中のジェラルドとプサムとの描写は、「遠出」の章の車中の、エジプトのファラオのように座るパーキンとアーシュラと対比されている。パーキンとアーシュラが「シングルネス」を達成した人間として描かれているのに反してジェラルドとプサムは互いに依存しあう人間であり、ロレンスにより批判されている存在である。ジェラルドは、父親が亡くなった後炭坑を機械化して経営することになる産業王であり現代機械文明社会の成功者であり代表者である男として描かれている。機械は「冷たい」ものである。彼は北方的美、氷の結晶に反射された太陽光線のような美を備え、均整の取れた体格、あり余るエネルギーと意志を持った男らしさを備えていて、外見上も内面上も北方的な人間であることが強調されている。しかし彼の人物像には両面性がある。彼は「非常に新鮮で世間の風に当たっていない純粹な感じ」と「静かな邪悪さと押さえられ

ぬあぶなっかしさ」を持っている。「湖上パーティ」の章において、ジェラルドの悲劇性は明白になってくる。この時彼は、機械に挟まれたために右手を怪我している。彼の意志の担い手である手の怪我は彼の意志が損なわれることの暗示であると同時に、彼が自分の墓穴を掘っていることを暗示している。これまで彼には不可能なことはなかった。だが彼は溺死した自分の妹とその夫を救えなかった。そして水中に潜った彼は「地獄の冷たさ」を体験し、自分の家族の特徴に思い至る。それは「一度ことが間違えると再び正しくならない」ということで、彼が幼い頃弟を事故で殺し旧約聖書中のカインのように区別された存在であったことである。炭坑主としてのジェラルドの最大の目標は、地下に眠る石炭を可能な限りの手段を用いて、できるだけ多く掘り出すことである。そのために彼は鉄のような意志で、容赦なく無駄を切り捨てるのである。炭鉱夫たちは巨大な機械の歯車の一つであり、ジェラルド自身も機械的組織に組み込まれている。機械とは人工の産物であり自然に対立するものである。「炭塵」の章における、彼のアラブ牝馬の非情な扱い方や暴力に寄る兎の支配には、動物に対する人間の意志力行使の思い上がりがある。また汽車に脅える馬の姿は人工と自然の対立を表わしており、ロレンスの立ち場は馬の側にあつて、機械に対する彼の恐怖感を表わしている。ジェラルドの行なう自然との格闘、つまり人間が万物の中心であり人間の意志こそ全ての支配力という考え方は、パーキンと対立する。パーキンは人間がこの世にいらなくても万物は相変わらず存在する、人間が万物の中心であるという考え方は思い上がりであると謙虚に考えている。パーキンはジェラルドにはおもり木があると思う。それは狂気のような意志への固執であり、これが彼の不幸なのである。おもり木は囚人の足枷を暗示していて、彼が古い崩壊の世界から抜けだせないことを示唆している。ジェラルドの恋人になったが最後には彼を死に追いやることになるグッドルーンは、彼のトーテムは狼であると思う。狼は北国に

生きる動物であり、南方の極限状況を示す出産中の女性のトーテムに対立して描かれている。ジェラルドは、まさしく北方民族の文明の極限を擬人化した人物である。つまり、パーキンがアーシュラと一緒に暖かな南方へ旅立とうとしている状況とは対比されている。ジェラルドとグッドルーンが雪に囲まれたチロルの山小屋から眺める光景は、出口のない場所として書かれている。この場面は、ジェラルドは出口のない世界に生きていることを暗示しており、彼は最後には雪に埋もれて死ぬ。彼が属していた世界は北方のキリスト教機械文明の世界であった。ゆえに、ロレンスは、北方で生きたジェラルドの生き方を批判しており、南方へ向かうことによって生き延びようとするパーキンを擁護していると言える。ロレンスの南方志向は、彼がイタリア、オーストラリア、メキシコ、アメリカのニューメキシコ州へ旅行しそこを舞台にした小説を数多く書いたことからもうかがえる。

II 星の均衡

次に、ロレンスの「闇」の特質の2番目のものすなわち「光」と「闇」の均衡という二元論の思想について論じてみよう。この思想は、意識と無意識、女と男という対立にもつながっている。『恋する女たち』においては、この対立がパーキンと二人の女性との関わりから描かれている。パーキンは、最後にはアーシュラという女性と理想的な関係を達成して結婚するのであるが、その前にハーマイオニーという貴族の女性と決別しなければならない。ハーマイオニーは、自意識の固まりであり理知を探究する女性として描かれ、真の官能性を持っていない女性としてパーキンつまりロレンスに批判されている。このような女性は最終的には殺意を抱き破壊的な行動をすることになるのであり、現代機械文明を代表する女性として批判されている。

一方、アーシュラは、パーキンの求める新しい男女の関係である「星の均衡」(star-equilibrium)という思想を受け入れることになる女性である。「星の均衡」とは、男は純粋な男の極となり、女は純粋な女の極となって対置され均衡を保つという思想である。この時男も女も没我的(impersonal)かつただ一つの個(individuality)を得ており、相手を支配したり服従したりすることのない自由な立ち場にある。“impersonal you”と“impersonal me”は単一であることにより自発性を確立できる存在である。単一性(singleness)とは自意識、古い観念の放棄を意味する。その時義務はなくなり衝動に従って人は行動するのである。

One must commit oneself to a conjunction with the other — For ever. But it is not selfless — it is a maintaining of the self in mystic way and integrity — like a star balanced with another star. (144)

パーキンは人類は嘘の固まりであるとし、個人の方が人類より有意義であるとして、個の重要性を主張する。個人は時として真実を含むが、多勢になると嘘が入るからである。この個人の純粋さは、現代の機械文明に組み込まれた集団の人間には、なかなか達せられないものである。炭鉱夫達は無数の車輪から成る機械の小さな部分品・道具であり、まさに単一性を喪失している。また異性に所有されることも個の喪失であり自由ではなくなる。パーキンはアーシュラとの会話で、「人間は最後の望みのものを手に入れるために全てを捨てなければならない」と言い、彼女に「最後のものとは何？」ときかれて、「わからない——共にある自由(freedom together)だ」(152)と答えている。「共にある自由」ということは「星の均衡」に喩えられている。

パーキンは時間に拘束されず気紛れである。ブレダルビィでパーキンの踊りを見た伯爵婦人は、「彼はカメレオンのように変化する」と述べ、

それを聞いたハーマイオニーは、「彼は自分達と同類ではない、彼は裏切り者で人間以下だ」と思う。しかしパーキンの一見否定的な特徴には、彼が機械的な牢獄の生活には相応しくないという意味が暗示されている。機械は変化をしないし時間通りであるから。アーシュラは、パーキンの肉体には偉大な自由な感じがあることを知る。またジェラルドもパーキンと柔道をした時、彼の体には見かけによらず（パーキンは病弱な様子をしている）強さがあることを知って驚いている。パーキンの特徴は、このような見かけによらない強さである。彼はまた、ジェラルドが羨む動物のような自発性も持ち合わせている。動物は人間の退化を意味すると同時に自然さを意味する両面性の象徴となっている。パーキンとアーシュラは「遠出」の章で、理想的な愛の交わりをする。だがここに至るまでに二人の間には絶えまない心の闘いがあった。パーキンは、自分の求める星の均衡という愛の形を彼女に説くが、また現在の生活の偽りを説くが、彼女にはなかなか理解できない。アーシュラは、愛は全てであるという古い愛の形を求めている。彼女には男を所有したいという思い、ロレンスが「マグナ・メイタ」⁷⁾と呼ぶ要素を持っている。彼女は男を所有したいと思う反面、奴隷のように仕えたいと思う。アーシュラの奴隷願望はハーマイオニーと共通のものである。

Hermione would have been his slave — there was in her a horrible desire to prostrate herself before a man — a man who worshipped her, however, and admitted her as the supreme thing. He did not want a odalisk. (286)

ハーマイオニーは支配欲と服従欲を同時に持っている。というより支配欲を持つ人間は、ロレンスの二元論によれば当然その反対極としての服従欲を持つということになるであろう。ハーマイオニーのような支配欲と服従欲を持つ人間は、ロレンスには批判されている。彼女がパーキ

ンを文鎮で殺そうとしたように崩壊の道を歩んでいるからである。

しかしアーシュラは他の女性と異なっており、その人物像には作者が求める理想の女性像が重なっている。彼女は小説全体の腐敗の雰囲気の中で、最も新生の可能性が高い女性である。彼女の特徴は、ハーマイオニーの古さと対比される若さである。それは芽吹く若枝や蕾に喩えられて、枯れかかった木であるハーマイオニーと対比されている。アーシュラは花のように自然で春のように温かい金色の光を備えている。パーキンはその金色の光に何度も魅了されるが、この光こそ、彼を暗黒の牢獄から明るい澄んだ自由な大気の中へ導いて行く道標なのである。この金色の光は単にアーシュラのひとみの色に留まらず彼女の性質を表わしている。

Her face was beautiful and full of baffled light as she told him all the things that had hurt her or perplexed her so deeply. He seemed to warm and comfort his soul at the beautiful light of her nature. (145)

アーシュラの温かさは、腐敗の川に属する人々つまりジェラルド、グッドルーン、プサム、ベルドーヴァの炭鉱夫たちの冷たさと対比されている。それゆえ彼女は、チロルの雪山の冷たい美しさには不自然さを感じ、パーキンに南方へ行きたいと言う。降ったばかりの雪の純粋な白さと冷たさは、彼女の魂を絞め殺しそうな気がしたのである。

パーキンとアーシュラは、結局、言葉による一致は見出せなかったが、二人の肉体の結合は、パーキンの求める「星の均衡」に等しいものである。「遠出」の章で、アーシュラはハーマイオニーへの嫉妬からパーキンをひどく罵った。その激怒において彼女は自我を出し切ったと言える。その後二人には平和が訪れる。パーキンはもはや言葉はいらぬのだと感じる。その平和は「完全な死」、「決して言葉で表わすこと

ができない彼の真実」である。それはハーマイオニーが求める分析的な「知」ではなくて、本能的な「知」であるため言葉では表せないのである。パーキンが子宮の中の窮屈さから生まれ抜け出てきたような気がした。赤児は、このように新生と自然さの象徴であると同時に、プサム、ハリデイ、ジェラルドが赤児や子供に喩えられる時のように、未熟さと退化の象徴にもなるという両面性を持っている。

アーシュラの魂の中にも新しい目が開かれた。「遠出」の最後の方で、二人の自動車の中の様子は「彼女は彼の隣に座り、星が何も考えずに釣り合いを保つがごとく、純粋な憩いに浸っていた」(319)と書かれている。二人はこの時点で、パーキンが説く新しい愛の形を達成していると言える。

一方、ジェラルドは女を愛することができず、その人間関係は常に支配と服従である。均衡がない生き方なのである。彼は人生の中心が何か分からない。女を人生の中心と考えているパーキンがアーシュラと新生を目指すのに反して、ジェラルドはグッドルーンと死に至る戦いを繰り返して行く運命にある。彼にとって女は一時的に苦痛を癒してくれる手段に過ぎない。彼がグッドルーンへ傾いていったのは、クライチ家を支配する死の重圧から逃れるためであった。そのためグッドルーンと彼が初めて性交した時も、彼のみが満足を得て彼女には苦しみが残されたばかりである。彼女は彼の一部である「死」を受け取る容器にすぎない。二人の関係は「永遠のシーソー遊び」であり、均衡が得られないのである。「狼」をトーテムとするジェラルド、氷の結晶に反射された太陽光線のような北方型の美を代表し、西欧近代機械文明を体現した男性であるジェラルドは、かくして最後には死ぬ運命である。それはジェラルドが自分から招いた死であるとは言え、パーキンは激しい悲しみに包まれるのである。

ロレンスの二元論の思想は、文体にも密接に組み合わされている。常

識上は正反対の性質である言葉が両面性を持っている。これはオクシモロンである⁸⁾。例をあげると「肉体的理性」(318)、「蜜でできた闇に似た最上の素晴らしい金色の光」(388)等がある。オクシモロンの多用がロレンスの小説理解を難解にすると同時に、深みを持たせ面白くしていると言える。

III 黒い男の登場

キリスト教では、父なる神と子なる神と精霊は同じであるという三位一体説がある。父なる神は人間には姿が見えない。そして人間の姿をしたキリストが父なる神の教えを人間に説く、という形がある。つまりキリストは神と人間との間の仲立ちをする人 (the Mediator) なのである。一方、ロレンスの作品では『カンガルー』において「黒い神」がサマーズによって唱道される⁹⁾。これは明白にキリスト教と対立していることがサマーズによって宣言されている。

“I don't believe that love is the one and only exclusive force or mystery of living inspiration. I don't quite believe that. There is something else.

.....

“Why,” he said, “it means an end of us and what we are, in the first place. And then a re-entry into us of the Great God, who enters us from below, not from above.

.....

“Not through the spirit. Enters us from the lower self, the dark self, the phallic self, if you like.”

“Enters us from the phallic self?” snapped Kangaroo sharply.

“Sacredly. The god you can never see or visualize, who stands dark on the

threshold of the phallic me.”¹⁰⁾

キリスト教は「愛の宗教」であり、性愛は生殖のためのものである。しかし「黒い神」は「恐怖の神」であり、また「性愛」を人間にとって第一義的なものとし、単に生殖のためのものと限定していない。「黒い神」は「性愛讃歌」の宗教を司っている。ゆえにキリスト教とは根本的に異なっていて、ギリシア・ローマ神話において大勢の女神や妖精や人間の女性・男性を愛した主神ゼウス（ジュピター）の要素を持っている。キリスト教では神の子であるキリストが人間に父なる神の言葉を教えるのであるが、ロレンスが信奉する「黒い神」の言葉を人間に伝えるのは、人間である「黒い男」である¹¹⁾。キリスト教の神は、絵画に描かれていることから分かるように北方的「白い神」であり、キリストも白く描かれている。キリスト教の神とロレンスの「黒い神」を比較して分かるように、彼は明白に反キリスト教の立場から小説を書き続けているのである。

「黒い男」として初めて登場するのが『恋する女たち』のパーキンであり、その後の小説では『アルヴァイナの墮落』のチッチョ、『羽鱗の蛇』のラモンとシプリアーノ、『チャタレー卿夫人の恋人』のメラーズ、『プリンセス』のロメロ、『太陽』の農夫、『処女とジプシー』のジプシー等である。

これらの「黒い男」は髪が黒かったり皮膚が黒かったり、雰囲気黒かったりと「黒いイメージ」に包まれている。彼らは官能的であり異教的である。つまり性愛の重要性を主張している。彼らは既存の価値観を批判したり、またはそれから離れた所に生きているという特徴を持っている。チッチョはジプシーであり、ジプシーは異教徒である。ラモンとシプリアーノはケツアルコアトルという異教の神を信奉している。ロメロは色が黒いメキシコ人である。メラーズは現代機械文明を憎悪してお

り、森を住処としている森の精のように黒く描かれている。彼らはみんな白人女性を本当の「性の喜びを知らない」ゆえに「真の人生を生きていない」状態から救い出そうとしている。キリストが人類を救い出そうとしたことに対して、「黒い男」は「白い女性」を救い出そうとしているのである。『恋する女たち』のパーキンも、性交においてはタブーというものを否定している。そしてアーシュラもそれに感化されていくのである。

結論

『恋する女たち』にはパーキンという「黒い男」がロレンスの代弁者として登場し、ロレンス神話の公式化が彼によってなされている。それは①北方的キリスト教文明の「冷たく白い世界」を拒否して「暖かく黒い南方の世界」を希求する思想である。また②パーキンは恋人であるアーシュラに「星の均衡」の思想を説く。この思想は、ロレンスの二元論を表わしており、男女という二元を基にして「光」と「闇」、「生と死」「愛と憎」「頭腦的知性と本能的知性」、「意識と無意識」というようにいろいろな次元で対応するものである。ロレンスは、『恋する女たち』においては、頭腦的知性を優先している現代のキリスト教合理的社会を批判しているが、最終的には『チャタレー卿夫人の恋人』で描かれるように、両者の均衡を求めている。そして「星の均衡」という公式は、二元論に関するロレンスの最初のマニフェストなのである。③「黒い男」はキリスト教のキリストに対応する存在であり、性愛を信奉して、「白い女性」に真の官能の喜びを教えようとする。パーキンはロレンスの神話における最初の「黒い男」として描かれている。かくして、『恋する女たち』においては、「闇」の公式化がなされていると考えられる。

*本論は、1978年6月に発表した『『恋する女たち』論考—「牢獄」からの脱出の可能性—』（信州大学教育学部紀要第39号）を、新たな視点に立って大幅に書き直したものである。

注

- 1) F. R. Leavis, *D. H. Lawrence: Novelist* (Chatto & Windus, London, 1955), p. 149.
- 2) G. J. Zytaruk & James T. Boulton ed., *The Letters of D. H. Lawrence Vol. II 1913-16* (the Cambridge Edition, 1981), p. 528.
- 3) H. M. Daleski, *The Forked Flame: A Study of D. H. Lawrence* (Faber Paper Covered Edition, London, 1965), p. 127.
- 4) D. Farmer & L. Vasey & J. Worthen ed., *Women in Love* by D. H. Lawrence (The Cambridge Edition), pp. 317-8. *Women in Love* からの、以後の引用すべては本文中の引用の最後に書き表わす。
- 5) J. Carey & A. Fowler ed., *The Poems of John Milton* (Longman: London and New York, 1968), p. 463.
- 6) Colin Clark, “‘Living Disintegration’: A Scene From *Women in Love* Reinterpreted” in Casebook Series *The Rainbow & Women in Love* ed by Colin Clark (Macmillan, Essex, 1969), p. 219.
- 7) 古代のギリシア・ローマ神話を中心とする異教の神話に登場する大地母神であるが、ロレンスはこの女神に「支配する女性」という意味合いを含め、作品中でたびたび用いている。
- 8) 鈴木俊次・有為楠泉編著『D. H. ロレンスとモダニズムの作家たち』（英宝社ブックレット、2003年）中の拙論「ロレンスの『闇』とコンラッドの『闇』」p.54を参照のこと。
- 9) 拙論「D. H. ロレンスの初期長編小説における‘The Dark God’の思想について(1)—『白孔雀』と‘The Dark God’—」（愛知大学文学会『文学論叢』第123輯、2001）pp.3-12を参照のこと。
- 10) B. Steele ed., *Kangaroo* by D. H. Lawrence (The Cambridge Edition, 1994) pp. 134-5.
- 11) 同上, p.7.